◆◆◆ 平成8年（一九九六）

1月×日　息子を「台北国際ブックフェア」の手伝いに行かせた。といっても、地方・小出版流通センター代表の川上賢一氏や「出版ニュース」杜長の清田義昭氏のお供である。

　店を手伝いはじめて一年、今では古書部をほとんど任せており、O生はお役御免「正午閉店」となった。

2月○日　田村哲夫氏による『奇兵隊日記』二千頁の校正ようやく完了。何はともあれ、めでたい限り。すぐ「人名索引」の作成に移る。松本二郎氏の下ごしらえがあるので楽だ。

2月×日　東京方面の古本屋は、マスコミなどによく登場しているが、全国的に見る限り、同業者は倍増し、店で売れるのはマソガと文庫だけ。専門化するための目録戦略も、載せたい優品（高く売れる本）は極端に品薄というし、前途は多難らしい。

2月○日　『陰徳記』と抱き合わせで、元就関係三点を出すべく準備していたところへ、来年のＮＨＫ大河ドラマが「毛利元就」に決定した。

『陰徳記』は数ある「毛利元就軍記」の本命だ。本書が八年かかったのも怪我の功名というべきか。

2月×日　『松菊木戸公伝』の製本が良くない。一冊ずつ点検して送ったつもりだが、それでも三人のお方からクレームがつき、すぐお取り替えした。見積りのとき「高くてもいいから、良い製本を」とあれほど念を押したのに。県内の印刷で泣かされ、東京の製本で泣かされ……。出版をはじめて二十二年、だんだん、質が悪くなっていく。

3月○日　毎月のように「これを貴杜で出版して……」との依頼を受けるが、残念ながら例外なくお断りしている。

　自費出版の「手伝い」はおいしい収入源。有難い話ではあるが、小杜のような古本屋兼業の超零細出版杜は、年間数点の史料物を復刻するのが精一杯なのだ。

3月×日　今回のＤＭも「古書目録」に力が入らない。今より少しでも重いと、一気に送料が倍増し、三千通で三十万円もふえるので、つい先送りになるのだ。グラムとの闘いは、目先欲にすぎないだろうか。

3月○日　本の売価が需給のバランスで変化する「自由価格本」がようやくクローズアップされてきた。時間と共に下がるのが普通だが、小杜の場合はその逆である。

3月×日　小杜から約二百メートル離れた同じ町内に、いま流行の古本大型チェーン店の本店ができ「全国制覇」をめざしたのは、一年三ヶ月前であった。あっという間に八店舗も出し、日本経済新聞に写真入りで、二度も大きく紹介されたが、その本店が今日から、古本屋をやめ「コミック喫茶」に転身した。岡目八目。最初からこうなることを予言していたO生の目は、日経の記者より、はるかに正確であった。

4月○日　『陰徳記』の予約特価がどうしても四万円より下がらない。

でも五百部限定の史料集で、頁あたり二十五円は決して高くないし、八年間も苦労したのだから、ここは強行突破しかない。「三点セット」のお客様へは出血サービスである。

12月〇日　ちょうど二年前、うちの店から歩いて約2分の同じ町内に、中古古本チェーンの「本店」として、他業種が参入してきた。

その店はあっという間に八つも支店を作り、日本経済新聞に二度も大きく取り上げられた。しかし「本店」はたった一年でマンガ喫茶に転向した。きちんと売買をしている店の近辺では、マニュアル商法は成り立たないのだ。

そのマンガ喫茶も満一年でやめ、今日から、古着衣料などを扱う流行雑貨屋になった。金だけが目的だから、変わり身も早い。

12月×日　上京。新宿高島屋のそばに新しくできた紀伊国屋へ。

ろくでもない本ばかり多くて、探すが見つからず、くたびれてしまう。多ければいいというものではない。もっと選択して置けないものか。

本は出版社への直接注文に限る。

12月〇日　東京古書会館の即売会は、超満員。平均年齢も小社のお得意様と同じ五十代後半くらいで、何だか安心した。山口県郷土誌を少し買う。

12月×日　小社の「番号入」出版物の番号記入のないものが、よその古本屋に出ていた。一冊ずつだから目くじらを立てることでもないけど、これは信用問題だ。

まず数年前、東京のある店に『品川子爵伝』。今夏は門司で『近世防長歴史用語辞典』。そして秋には防府で『吉田松陰詩歌集』『松陰先生交友録』『松陰先生と吉田稔麿』と続いた。

普通の本なら分からないが「限定番号入」なのですぐばれる。もちろん発見しだい買い取り、印刷所に厳しく抗議をしている。

12月〇日　防府市のお得意様、馬屋原隆氏より電話あり。

「このたび復刻される『大日本古文書　毛利家文書第一巻』の一九四頁にある〈高屋兵部信春〉は〈馬屋兵部信春〉の誤りです。これは『吉川元春』（瀬川秀雄著・昭和十八年刊）の一一一頁でも証明されており、山口県文書館で原本を判読して頂くと、その通りだと言われました」とのこと。

小社の守備範囲ではないけれど、とりあえずご紹介まで。

◆◆◆ 平成9年（一九九八）

1月元旦　今年も賀状を出さなかったのに沢山頂き、感謝あるのみ。

1月〇日　年末年始は、昔からのお得意さまが遠路はるばるご来店下さるのに、いつも私が店に居ず申し訳ない。

今は店をすべて息子に任せている。店番嫌いの私よりはるかに熱心なので、お客様の評判はいいようだ。

1月×日　全国的に、古本屋をめぐる情勢は良くない。

原因は、まず大型郊外店の増加。次に、お客の欲する本の減少であろう。新刊の売れ行きをそのまま反映して、買い入れが一過性の読み物ばかりになっているのである。

こうなるのを見越して、二十数年前から、専門分野補強のための地道な復刻出版路線を開拓してきた小社の方針は、間違っていなかったようだ。

2月〇日　古書店主の文章を集めた『古本屋の慈蓄（うんちく）』（高橋輝次編・燃焼社刊）のトップに、O生のエッセイ数編が掲載された。

でも大きなミスあり。「説教する女は必ず不器量だ」が「不器用」になっている。著者に校正を一度も送ってこないような出版社に、転載を許可した自分にも落ち度がある。初出の朝日新聞社に申し訳ない。

それにしても、冒頭つまり第一行目に誤植のある本も珍しい。

2月×日　昨夏は八年越しの『陰徳記』を刊行し、いま『奇兵隊日記』も六年目にして峠を越えた。ようやく暇ができたので、新しい倉庫を見つけて、二十年ぶりに大移動をおこなう。

今回も含め、これまでずいぶん「古書目録」は手抜きをしてきたけれど、これを機に、次回からは、これまでより少しはマシなものを出したい。（狼少年みたいに、何度も同じことを言っているが）

2月〇日　東京大学出版会から『毛利家文書』『吉川家文書』『小早川家文書』の三点入荷。内容はもちろんであるが、製本も文句なし。直ちに発送する。それにしても、総計五トンもあったから大変だ。

2月×日　予想外の予約でやむを得なかったとはいえ「五百部限定」の『萩の乱』を千部も売ってしまったことへのペナルティとして、今回の出版物三点および、「古書目録」によるお買い上げ三千円以上の送料を、すべてサービスすることにした。

2月〇日　今回パンフを同封する『毛利元就卿伝』『吉川元春』『小早川隆景』の三点はいずれも再復刻である。それぞれ十年以上前に限定復刻しており、同じ本では格好がつかないため、装丁に念を入れ「特装版」とした。

新刊屋の店頭には毛利氏関係の本があふれているけれど、これら三武将の実像を探る手がかりは皆無に近く、それを求める声も多い。この三点は、このほどお買い上げいただいた、東京大学史料編纂所の『毛利家文書』などを

解読するため最良の鍵でもあり、たとえ極小部数でも、この際きちんと出しておきたいのである。

この『毛利家文書』など三点をお買い上げ頂いたお方に限り『毛利元就卿伝』『吉川元春』『小早川隆景』のお支払いは年末までよいと思っている。

2月×日　消費税アップで、本屋は足並みそろえて外税になるらしい。でも小社はこれまで通り内税を貫きたい。へそ曲がり路線を貫くことができるのも、超零細のとりえなのだ。

2月〇日　ＮＨＫ大河ドラマのおかげで出版予定がずいぶん遅れた。

次は、三坂圭治著『萩藩の財政と撫育制度』、田村哲夫編『山口県地名明細書』、伊藤博文関係の本などが控えており、脇の本棚では「維新回顧録叢書」や松陰関係の本が「早く復刻してくれ」と地団駄を踏んでいる。

2月〇日　このたび売らせてもらった東京大学出版会の大日本古文書『毛利家文書』『吉川家文書』『小早川家文書』計九冊セットの小社販売分は、奥付に「発売元」として小社のアドレスから電話番号まで記入して頂いた。

この叢書は、装丁にお金をかけているとは思えないのに風格がある。伝統というものであろうか。

3月×日　上京。足を棒にして古本屋を巡り、早稲田大学出版部『陰徳太平記』の極美本や、和本の『世外侯事歴・維新財政談』など、復刻の原本あわせて十五万円を買う。これは、年間六点の出版では間に合わないぞ。

東京でも専門書は店ではあまり売れないという。公共はもちろん、個人のばあいも目録の方が手っ取り早いし、またそれだけで本代を使ってしまうからであろう。

3月〇日　神田の三省堂書店から「毛利元就コーナー」が消えた。八重洲ブックセンターもそうだ。東日本での関心はこんなものか。

3月×日　東京大学出版会の幹部と打ち上げ。楽しい酒となる。今回の三点は小社が売りすぎたため残部がなくなり、仕方なく各三百部を増刷したとか。

「すぐ入手困難になる」とお得意さまにＰＲしたのに……。またこれまで、すぐ増刷したことなどなかったのに……。完全試合の寸前、ツーアウトからテキサスヒットを打たれたような感じである。

3月〇日　「伊藤公資料館」が生誕地の大和町に新しくできるのを記念して関係書を復刻することになり、東行記念館の一坂太郎氏に選んでもらった。近代日本の原点を知るために欠かせぬ二冊は、この二十年間、小社の古書目録にも出たことのない希観本である。大和町に少し買ってもらおうかとも思ったが止めた。記念式典などで配っても、読んでくれる人には届かないと思うからである。

4月×日　本誌の「山口県史料目録」を懸命に作っている。これまでの目録をよく調べてみると、一冊二万円以上もする高額書のうち何点かは、売れないまま無神経に何度も登場させている。また、他店で同じものを見つけると、やたらと買いあさり、結局何冊も在庫を抱えてお粗末なこと。

4月〇日　『毛利元就卿伝』『吉川元春』『小早川隆景』の三点出来。初の試みとして、装丁を「三度貼り」にしてみた。背も合皮のデラックスな仕上がりで、戦国時代を質実剛健に生き抜いた三卿殿は苦笑しているだろう。

　でも、この「三度張り」製本は手作業で後継者がいないため、あと数年しか出来ないという。しばらくこれを続けてみようか。

4月×日　今回の三点は再復刻だから限定番号なしのつもりだったが、期待されているらしいので記入した。「限定番号」について、小社の規定は次の通りである。

　①予約特価五千円以上の「限定版」にのみ記入する。

　②二冊以上のセット物は、第一冊目にのみ記入する。

　③版を重ねる予定の本は「限定版」にしない。

　④マスコミ用の「私家版」（番号なし）は今後作らない。

5月〇日　三点のうち『吉川元春』はもともと原本の印刷が悪く、十二年前に初めて復刻したとき、原本を六冊も集めて良いところだけを刷った。販売用パンフではその旨断ったが、復刻本には何も書かなかったところ「もっと印刷の良い本があれば取り替えて……」という電話を三名のお方から頂いた。もちろん、説明すると快く了解して下さった。

5月×日　今年のゴールデンウィークは飛び石だったせいか、例年より来店者は多い。それにしても、郊外に大きなショッピングセンターがたくさん出来たため、県内随一の地価を誇った商店街の人出は全盛期の三分の一になった。

　さいわい小社はライバルがないため、昔に比べて子供のお客が減っただけである。

5月〇日　三坂圭治氏の名著『萩藩の財政と撫育制度』を今回復刻の予定であったが、倉庫を整理すると数冊出てきた。あまり再復刻が続くのも気合いが抜けるので、しばらく延期しよう。

5月×日　「『奇兵隊日記』はいつ出るのか」とよく聞かれる。着手して満六年。幾多の紆余曲折を経て、田村哲夫氏による校正（六校）を終え、いま手元で最後の調整中だが、ここへ来ての伏兵は膨大な「人名索引」である。なにしろ本文だけで二千頁もあり、もしページが変わったりすると、皆やり直さねばならず大変だ。

　「もう金輪際、校正の必要な出版はしないぞ」「この本だけは、絶対に安く売らないぞ」と毎日のように決意を改め、絶叫している。

　ともあれ、今秋には本格的なＰＲを開始したい。

5月〇日　校正の必要な本は出さないといいながら、田村哲夫編『防長維新関係者・雅号便覧』の出版を進めているが、こればかりは例外だ。手足の不自由をおしてご夫婦で『奇兵隊日記』の校正をして頂いているからである。

6月×日　この十日間に県内と北九州で、〇十万円の買い入れ三件あり、クルマで東奔西走した。これがみな右から左へ売れれば、文

句はないのだが……。

6月〇日　宇部市で年一度の山口県古書組合総会。郊外型古本チェーン店の話でもちきり。すでに斜陽となっている出版物の世界なのに、マニュアル化されて誰にでも始められるからか、他業種からの参入は今も続いている。よその花は紅いのだ。

　ライバルの出現は、マンガを主力商品とする既存店には打撃である。しかしそれも開店時だけで、永続性はないらしい。たとえマンガとはいえ、本は他の商品とは完全に違う。一点一点すべてが「質」の違いで成り立っている商品を「量」でしか扱えないところに、マニュアル商法の限界がある。質と量は、精神労働と肉体労働、心と物、信用と資本などの言葉に置き換えて考えてもよい。原点のない古本屋は続かない。

6月×日　『伊藤公実録』『孝子伊藤公』『防長文化史概略』の価格を決定。内容や頁数から考えて「三点セット特価二万五千円」の予定だったが、思い切って「二万円」にした。今どき、五百部限定番号入・上製復刻版を「頁単価十二円」で売る出版社はないと自負するのだが……。

7月〇日　待ちに待った「マツノ通信」創刊号出来。しかし表紙を見てぴっり仰天、色が違うのである。茶色のつもりだったのに真っ赤になっている。

　まあいいか、どうせ「火車」で売り出した店だ。それにしても、色の道は難しい。

7月×日　「マツノ通信」の発送に初めてヤマト運輸の「クロネコメール便」を使ってみた。受取証はないけど格安のため、カタログの配達などに最近よく使われている。でも、すぐには届かないものらしい。本誌に寄稿をお願いした下関の一坂太郎氏にも届いていない。その中に原稿料〇万円をしのばせておいたのに……。

　追求した結果、配達下請のクルマの敷物の下に残っていたとかで八日目にようやく届いた。気になるので、お得意さま全員に緊急ハガキを出す。結局、二千五百人中十人から未着のお知らせあり。

11月〇日　米国の出版流通業界視察旅行へ。

12月×日　ようやく『奇兵隊日記』のパンフを発送。田村哲夫、田中彰、故松本二郎の諸氏に、よくぞここまでと感謝あるのみ。

12月〇日　早くも朝・毎・中国新聞および共同通信から『奇兵隊日記』についての取材あり。一月中旬ごろ記事になるらしい。それを見て注文された人に「もうありません」はない。少し増やそう。

◆◆◆ 平成10年（一九九八年）

1月×日　『奇兵隊日記』の最終校正を印刷所に渡したとたんにカゼを引き、二週間も治らず。これまではいつも一日で治っていたのに…。それにしても、長い長い七年間であった。たとえ一千万円積まれても、こんな気の狂うような綱渡りは、もう御免だ。

2月〇日　共同通信発の記事は必ずしも日経に載るとは限らないそうだが、運よく夕刊に載ったらしく、午後から夕方にかけてひっきりなしの電話。ついに日経だけで五十部以上の注文あり。その他の地方紙にもいろいろ紹介され、全国各地から注文が殺到する。

小社では新聞等を見ての注文はそのまま商品を送らず、改めてパンフを送った上で正式な予約を受けている。

「大学院の息子に買ってやる」というので何学部か聞いたら哲学とのこと。この親ばかチャンリンと思いながらパンフを送る。案の定キャンセルしてきた。また「パンフなどいらん、買う買う」と意気込む人に限って、キャンセルしてくるのもおかしい。今回の歩留まりは約七割であった。

2月×日　ついに写真週刊誌「フラッシュ」からも取材に来るという。出版不況下、こんな高額の学術書が売れるのは「人が犬に食いつく」珍事なのか。編集長が高杉晋作ファンというので断るわけにもいかず、記事をチェックさせてもらうことで了解した。

結局、記事そのものは、まじめであったが、派手な雑誌なので、書店に売っている間は、身内以外だれにもしゃべらず。

2月〇日　息子が神田の古書市で、幸運にも『奇兵隊日記』の傍系史料を札した。小倉戦争の記録でまとまっており、貴重なものらしい。もっと早ければ今回の付録につけたのに。

2月×日　久しぶりに岡山の古本屋へ。いずこも同じく旧市街は人通りが少ない。郊外の超大型店・万歩書店では山口県史料などを五十冊くらい買ったのに、市内ではたった二冊であった。

3月6日　待ちに待った発送日。『奇兵隊日記』五百五十セットを一気に送り出し、七年間の苦労も吹き飛ぶ。わが生涯最良の日なり。

3月×日　『奇兵隊日記』を発送後一週間。どこからも、何の苦情もこない。これでやっと人心地がついた。品物を見てのキャンセルは三名だけ。「キャンセル待ち」なのでマスコミには送らず、これも気分がいいものだ。

3月〇日　下関の元お得意さま宅へ買い入れにいく。市町村誌や郷土誌などを十五万円で買ったが、どうも高すぎたようだ。

とにかく本が売れず回転が悪いため、よほどのもの以外は市の相場も下がっている。古本屋だけでなく新刊屋も出版社もすべてお先真っ暗なのだ。

3月×日　たった四人で『奇兵隊日記』のささやかな打ち上げ。普通、こんな行事はしないが今回は例外である。

3月〇日　上京、池袋にできた大型新刊店を見学。「本だけで勝負」の姿勢は買う。また

アメリカに習って各フロアに椅子と机を置き、ゆったりとした雰囲気を出しており、すばらしい店である。しかし、ますます小さくなっていくパイを巡っての大型店同士の大激戦の行く末は、どう考えても共倒れしかない。

古書店も本の動きが鈍い。たまに欲しい本があっても、『大内氏実録』二万八千円、『久坂玄瑞全集』五万八千円などの値がついている。自分の復刻した本がこんなに「出世」したのを喜ぶべきか。

4月14日　「東行忌」に『奇兵隊日記』の「限定番号第一番」を献呈のため下関の東行庵へ。式典冒頭の行事で、テレビや新聞にも報じられ面はゆい限り。

5月2日　田村哲夫氏のことが、朝日の西部本社版・文化欄に大きく掲載された。お怪我のあと、両手両足の不自由にめげず『奇兵隊日記』を完成されたことは、もし精神世界のパラリンピックがあれば、金メダル間違いなしの快挙といえよう。今も奥様の手を借りて、小社の出版の校正を次々とやって頂いている。

5月×日　『長府藩報国隊史』を限定五〇〇部のつもりで印刷所へ注文したあと、にわかに自信がなくなり三五〇部に変更……。

次頁上覧の通り『奇兵隊日記』がいちばん売れていいはずの下関が、特に落ちている。対人口比ではもっと少ないからである。

本書に限らず、今後は「限定三〇〇台」が主流になるだろう。

5月〇日　「小社の出版物と目録の注文品を一緒に発送すれば送料が節約になる。その場合、もしどちらか一方をサービスするつもりなら、両方を無料にできる」というわけで早速実行に移す。

その代わり、目録発送時に出版物がそこになければならない。だからこれまでのように「まず予約を取り、刊行を遅らせて刷り部数を調節する」ことはできず、少な目に作るようになり、これまでにもまして刊行と同時に売り切れる可能性は強くなる。仕方がないか。

5月×日　一坂太郎氏と一献。史籍協会本『大久保利通日記』と『広沢実臣日記』元版の極美本を入手したとのこと。

大久保は長州人ではないけど、日記には長州関連の史料が多く、小社で復刻してもおかしくない。広沢はもちろんだ。予定を変更してこちらを急ごうか。

9月〇日　「私は東京の〇〇大学に通う学生です。つい最近ですが、吉田松陰先生に興味を持ち、友達と数人で学び始めました。近く仲間と小合宿をし、そこで私は松陰先生について発表させて頂きます」というお便りを、最近お得意様になられた学生さんから頂き嬉しくなる。

9月×日　県内の最北端、島根県境まで、息子とクルマ2台で買い入れにいく。持ち主は整理のためわざわざ東京から帰ってこられた。

岩波系の全集が多く、それでも美本なので「世が世なれば高額品」を〇十万円で買う。昔と違い、売れてみなければ儲かるかどうかわからないが、数日後「父の集めた本が生きますことを……」という礼状を頂くなど、感じ

のいい買い入れではあった。

10月〇日　神田の老舗古本屋に大がかりな窃盗団が入り、夜陰に乗じて古書数千冊を盗んだという。これまで考えられない大がかりな手口からして、第三国人だろうと思っていたらその通りで、しかもすぐ一人だけ捕まった。他の商品と違い、換金するとき足が出たのだ。

　外国の泥棒が入るとは古書業界も一人前。それにしてもすぐ捕まるとは間抜けな奴。

11月×日　朝日新聞山口版では「朝日懇話会」という名称で県内各界から毎年六名を選び、座談会をおこなっている。今年のテーマは「地方政治」である。人材不足のせいか、政治オンチの〇生にもお呼びがかかり「パセリでよければ」という約束で厚かましくも参加した。

　春秋二回の座談会が記事になる。その「秋の部」が今日終わったのである。もう一つのノルマ「随筆五編」の紙上発表は、すでにトップバッターですませたし、これで何とか責任を果たしてほっとしている。

11月〇日　このところ古本屋にもいい話はなく、不況、本離れ、ライバル急増と三重苦の逆風が吹きすさんでいる。

　ただ県内では、ブックオフに類する郊外型の店はむしろ減っている。始めてはみたけれど、儲からないことがわかったのであろう。徳山市近辺にもそういった古本屋はあるけど、店頭にこちらの欲しい本があったことは殆どない。お客様もよく知っていて、高く売れそうな本はそんな店に持っていかないのだ。

11月×日　谷林博著『世良修蔵』の復刻について、同書の刊行に直接関与された新人物往来社の大出俊幸氏に復刻承諾のお願いをすると、ご多忙中にもかかわらず即座にご承諾を頂いた。「周防部出身の受難志士伝」として、内田伸著『大楽源太郎』、村上磐太郎著『赤根武人の冤罪』などと共に復刻したいのである。

◆◆◆ 平成11年（一九九九年）

1月〇日　お得意様から広島市の「草葬女性塾」の幹部二人を紹介された。どちらも四十歳代の美人である。「今の日本をよくするためには、松陰先生の教え、特にその教育について、しっかり学ぶしかない」とか。

1月×日　『萩藩諸家系譜』と『萩藩の財政と撫育制度』を発送して五日たつ。『萩藩諸家系譜』を一人で二冊も買われた山口市のお得意様から「自分の家が出ていない」という理由で返本があったほか、どこからも苦情はなく一安心。本書は限定三八〇部の予定を四八〇部に増やした。

　両書ともマスコミに送らず、これで一年以上、限定の出版物は関係者以外、ＰＲ用としてはどこへも贈呈していない。へそ曲がりかもしれないが、自分では理想の形に一歩近づいたと思っているのだ。

1月〇日　発送日から一週間目にして、すでに売上の半分以上が入金されている。さすが毛利藩士の末裔、またはその藩の財政史研究者だけある。

2月×日　徳山市美術博物館の「児玉源太郎とその時代展」を記念して、直木賞作家・古川薫氏の講演会。児玉の生涯を描いた『天辺の椅子』の著者らしく、話題性に富む充実した講演であった。

2月〇日　上京。いずこも同じ不況の大合唱。活字業界は出版社から古本屋まで、他の業界をも巻き込みながらの戦国時代に入ってきた。やがて無間地獄の末、その大部分は「前世紀の遺物」と化するであろう。生き残りのキーワードは「ユニーク」と「スモール」しかない。

2月×日　二年も試行錯誤してきたが、ようやく究極のペースを見つけた。今年からは年二回、三月と九月には必ずこの「マツノ通信」を刊行しよう。出版はその合間をみておこないたい。

2月〇日　大村益次郎研究乃第一人者・鋳銭司の内田伸氏による襖の下張りから出た『大村益次郎史料』の解読が進んでいる。この三月末までにあらかた出来れば、こちらを先にするつもりだったが、あと一歩なので、とりあえず昭和十九年版の伝記『大村益次郎』を復刻することになった。

　この未発表『大村益次郎史料』は、今秋詳細を発表するまでマスコミにも出さない。乞うご期待。

2月×日　経費の都合により「マツノ通信」第3号を東京で作成したところ、なぜか表紙が第2号とまったく同じ色で印刷されてきた。これではあまりにも芸が無い。直ちに刷りかえ、また一週間遅れた。

3月〇日　「マツノ通信」第3号ようやく発送。今回はクロネコメール便でなく郵便の冊子小包で発送したところ、時間的にもきちんと到着し、そのうえ何と一通も返ってこず、百パーセントの完璧な配達率。これまで持っていた郵便局への不満の大半が一気に解消した。

3月×日　「マツノ通信」による注文は今回も

多い。心から感謝しながら発送に追われる日々。

3月〇日　長く待たされた『吉田松陰全集』の復刻許可がようやく下りた。「小社刊行物の版面をそのまま使用した復刻はお断わりしていますが、かつて玖村敏雄著『吉田松陰』を許可したことでもあり今回に限り了承」とか。

　天下の岩波書店が、地方の超零細出版社に自社の全集物の復刻を許可するなどあり得ないと半分は諦めていたのに、文化遺産を独占しない態度に改めて最敬礼。十二冊六千頁もあるこの全集を「特価六万円」で復刻しようと思っているが、安すぎるであろうか？

3月×日　古書目録を刊行する古本屋がふえ、居ながらにして全国の傾向を知ることができる。一部専門書の値上がりはますます激しく、昨夏小社が三万八千円で十名様に販売した『高杉晋作全集』（全二巻）は、すでに五万円。ようやく一冊だけ見付けた、今回復刻する『大村益次郎』も四万五千円だ。

3月〇日　東行庵の「晋作の足跡を訪ねる上海の旅」に参加した。上海の郷土史家、学者、学生などと晋作の上海日記「遊清（ゆうしん）五録」について討論会をおこない、その日記に記されている場所を尋ねる。ある孔子廟の前で古書市をやっていた。日本で昭和三十年頃の、印刷・製本共に粗悪な本が多く、内容もハウツウ物や読み物ばかりのようだが黒山の人だかり。繁華街では開業したばかりの本屋を見た。ニューヨークのど真ん中にあるような最新の大型店は五階まで超満員。驚いたのは、どの棚の前も熱心に「活字」を読みふける人でいっぱいなことであった。

　日本の本屋でお客が多いのは、マンガに雑誌と相場は決まっているのに、この本屋にマンガコーナーはなく、すぐクズになるような雑誌も極端に少ない。軍事コーナーの前にもたくさんの男性がいた。お客が読んでいるのはすべて「活字」なのが印象的。よく見るとそのほとんどは中・高校生くらいの若い人ばかりだ。もちろん立ち読みだけでなく、よく売れてもいた。

　晋作がこの光景を見たら、その日記に何と書き残すであろうか。

3月×日　いつも出版予定を発表すると、何かしらお客さまから反応がある。逆にまったくないこともあり、その時はあまり成績がよくない。今回の『大村益次郎』がそれだ。大冊なので失敗は許されない。ちょうど『吉田松陰全集』への需要も知りたくて、急遽アンケートをおこなう。

4月〇日　一坂氏からの情報で、『伝家録』『追懐録』の著者のご子孫がようやくわかった。すぐ連絡を取り、どちらも即座に快諾して頂く。著作権の切れた本ではあっても、できることならご遺族の了解を取りたいのである。

　それにしても、小社が復刻する本の関係者は、判で押したように東京におられる。やはり維新後の成功者は、すべて上京したのであろう。

4月×日　久しぶりに島根、鳥取両県を回った。益田、浜田までは山口県関係の本もあったが、松江以東にはほとんどない。道路沿いの「本」の看板は山口県よりはるかに多い。

新刊屋も中古本屋もみな、CD、ビデオなどと一緒なので入ってみる気もしない。

4月〇日　アンケートを送って一週間。意外にも『大村益次郎』が多く、断トツである。こんなに待たれているのに、なぜ反応が全く伝わってこなかったのか？大村益次郎の読者だけあって、何事にも沈着冷静、少しも騒がないということなのか。

　それにしても出版物の販売予測は難しい。二十六年間も山口県史料を復刻してきたのに、その最高の人物の最大の伝記の予測さえできないとは……。

5月×日　米ABCニュースによるとアメリカ政府の文書の七五％は電子化されているが、今日の最新式が明日はゴミになるコンピュータの世界で、二十年後、それらを解読できる保障はどこにもない。あらゆる記録が歴史の闇に消えてしまいかねないという。（毎日新聞「余録」99年5月7日）

　やはり保存は本に限る。とくに小社の「箱入上製本」は、現在出版物の殆どを占めている「箱なし並製本」に比べ、百年は長持ちする。これは強がりではなく、いつも明治時代の本を見ている古本屋ならではの発見なのだ。

4月〇日　入院中の田村哲夫ご夫妻による『高杉史料』の解読・校正は着々と進んでいる。有り難いことである。

4月×日　「三点セット特価がこんなに安くなるのなら、一冊しか買わないお客にも安くすれば……」と思われるかもしれない。こちらの胸中では、小社の出版物をすべて買ってくださるお得意様への、これはせめてものサービスのつもりなのである。限定本をこのセット価格なら、どこに出しても恥ずかしくないと思っている。

7月〇日　『追懐録』『伝家録』『大村益次郎』が完成。限定番号を記入して発送する。「今回は三点とも仕上がり上々、言うことなし」と思っていたら『追懐録』の口絵が上下入れ替わっていた。よく見たつもりなのに……。

7月×日　お客様の最年長者、萩の九十八才になるお祖母さまがあの世へいかれた。新陳代謝は世のならいとはいえ、寂しくなる。救いは「貴店の目録を送ってください」という新しいお客さまが次々と現れていることである。

8月〇日　小店のある徳山駅前商店街の人通りは、平日で最盛時の約五分の一、土・日曜は十分の一に落ちた。家賃は一割しか下がらない。三年前からこの仕事に入り、店を任されている息子は「店にへばりついてもやっていく」という。「新幹線の停まる駅から歩いて五分」の立地条件が唯一の頼みなのだが……。

8月×日　宇部市へ買い入れ。二十年来のお客様は工学部の大学教授である。奥さんが電話で「郷土誌五十冊、歴史書百冊、美術書五十冊ほど」といわれたので、一人で行ったところ、その三倍以上あり、みな大きな厚い本ばかり。それを日当たりの良い三階から運び降ろし、久しぶりに滝の汗、今夏の最も暑い日となった。

8月〇日　毎日新聞社が昭和四十年に刊行し

た『激動二十年』は、太平洋戦争前後の二十年間、まさに激動の時代、県内に起きた色々な事件を、刊行当時の各支局が取材し連載したもの。いま読んでも面白く、考えさせられ、史料としても貴重なので復刻させて頂くことになった。

8月×目　本誌（マツノ通信　4号）「特価コーナー」の『壬辰戦乱史』（定価三万円・特価二万五千円）は前号の目録で六万円につけてニセット売れている。

「二十年も前の本で当然品切れ」とばかり思っていたのに、版元でよく調べてもらったところ、まだ残っていたとのこと。

　あちこちの古本屋で本書を見付けては高く仕入れてきた小社の在庫はどうなるのか。また高価に売ったお得意様へはどう対処すれば……。でも、相場とはそうしたものと割り切るしかあるまい。逆の場合もあるのだから。

9月〇日　十五年ぶりに自社の「出版目録」をつくる。ごく限られた「時間をかけて沢山売りたい本」以外はそのつど売り切ってしまうから、目録を作っても仕方がなかったのだ。でも「なぜ在庫を持たないのか。非良心的ではないか」というご質問を受けるかも……。それに対してはこう答えるしかない。

　普通の出版社が十年かけてようやくＰＲするところを、小社は一気に売ってしまう。人より速く仕事を終えた者が遊んでいるようなもので、むしろ効率の良さを誇っていいのではあるまいか。もちろん矛盾した税制のため、在庫を持ちたくないという、一般的な理由もあるけれど。

　専門分野、販売方法、印刷部数などを極限までしぼることによって、自分なりに専門店のいき方を模索しているのだ。このような出版社もあってよいと思う。

9月×日　上京、一部の本屋を除き書棚が硬直化してきたようであるが、それでも脚を棒にしたご利益で「山口県関係書」三十点以上を買うことができた。

　『吉田松陰全集』は数年前までよく店頭で見ていたのに、今では三種ともさっぱり見なくなった。そろそろ復刻の潮時ではあるまいか。

9月〇日　近著『ルネッサンスパブリッシャー宣言』で、コンピュータを武器に大変革期の出版界へ切り込んできた、ひつじ書房の松本功氏が初めて来店され一献。

　本書は、小社の扱っている史料物とはまったく逆の、学問の最先端において、二十一世紀の出版を模索する貴重な提案に満ちた、まさに題名通り〈出版革命宣言〉である。卓抜な発想と精力的な行動力で低迷する出版界を活性化している松本功氏こそ、この業界における高杉晋作なのだ。

　自称「何周遅れかで業界のトップをいく」Ｑ生が、正真正銘のトップを走っている若手に何らかの影響を与えていたとは……。面映ゆくも、面白い話ではあるまいか。

　これを機に将来のためインターネットを少しかじってみよう。

10月〇日　出版物の「締切速報」で新たに81通の注文を戴く。みんな忙しく、ＤＭといえ

ども経費を使って何度も念を押さなければ駄目なのだ。

今回の「マツノ通信④」は約二一〇〇通を発送し、七〇〇通の注文を頂いた。小社の出版物への注文を加えてではあるが、三割三分三厘という確率はおそらく、全国どこの古本屋のそれよりも多いと思う。単価が安いのでこれくらい動いても当然であろうが……。

同時に刊行した『趣味の維新外史』、再復刻の『毛利輝元卿伝』ともに残部僅少。この未曾有の絶不況時に有難いこと。

10月×日　目録注文の発送を終えたあとの本棚に、松陰と乃木だけが目立つ。……残っているのだ。乃木はいつものことだが松陰は初めてである。懸命に集めすぎ、結果としてマンネリ化したのか、それともお客様の志向が変ったのか。『吉田松陰全集』の復刻を前に考えこむ。そうだ『松陰先生の教育力』を復刻して占ってみよう。

10月〇日　新しいパソコンを買う。ボタン一つでインターネットを見ることもできるのに、なぜか全く見る気がせず、相変わらずワープロ使用のみ。眼前の仕事に終われていることもあるが、自分の主義として、テレビはおろか毎日の新聞さへ最低限にしか見ないようにしているのに……と思ってしまうからである。

といっても将来のお客様のために、ホームページだけは作った。もちろんこの「火車日誌」や「古書目録」を、そちらへ先に出すような愚はしない。

11月×日　いま岩波書店で復刊中の『奈良六大寺大観』は14冊で計49万円もする。小社ではその昭和四十八年版の全巻揃いをたった六万円で、半年前から店頭に陳列しており、「マツノ通信④」にも掲載したが、まだ売れていない。いかに古本屋で買わない人が多いかということでもある。

そういえば今回の「マツノ通信④」でも注文いただいた七〇〇人のうち、小社が同時に刊行した「出版物のみ」の人は一八四人つまり四人に一人。「古書目録のみ」の人は二三六人、つまり三人に一人の割である。

11月〇日　山口市の日赤病院に田村哲夫氏を見舞う。なかなか退院できないが、お元気そうであった。奥様もおられたので、改めてお二人に『奇兵隊日記』『高杉晋作史料』の解読をして頂いたことへの御礼を述べる。そういえば今回出版する『大村益次郎史料』も、難解な文字を読んで頂いている。

11月×日　『大村益次郎史料』パンフの推薦文は、編者・内田伸氏の依頼で、一坂太郎氏に頼むことになった。

11月〇日　出版不況はますますきびしく、聞くところによると、歴史専門のある大手出版社が大リストラをしたとか。まだまだこの傾向は続く。

12月6日　読売新聞西部本社版夕刊の文化欄に、拙稿「二十一世紀の古本屋」が掲載された。次の「マツノ通信⑤」に転載しよう。

12月×日　『大村益次郎史料』のパンフを作っている。「ふすまの下張り」は、一度捨てられたものであり、普通の個人全集には絶対に入らない種類のネタも多い。どの出版物でも作

る途中「これは売れる」と思い込んでしまうものだが、今回は特にその感が強い。

12月〇日　『松陰先生の教育力』によれば、松陰の弟子・入江九一はある時期、書く文字まで松陰そっくりになったとか。そういえば最近、内田伸氏のお顔がますます大村益次郎そっくりに見える。「教育力」は没後百年以上を経てまで影響を与えるのであろうか。

12月×日　萩の長老・田中助一氏が逝去された。享年八十八歳。同氏編纂の『萩先賢忌辰録』は復刻を待たれている希書である。その復刻版の「解説」を元萩市郷土博物館長の近藤隆彦氏にお願いする。

12月〇日　東京で劇団文化座の新作『祭りはまだか』（主演津田二朗）の初日を観る。まだ無名で「何をなすべきかを求めて欝屈していた頃の、高杉晋作、伊藤博文、井上馨ら長州藩の若者たちの、品川の妓楼での一日を描いた作品。脚本、演出、演技ともに優れており、すごい迫力であった。作者の鳥海二郎氏は、この作品で今年度の「文化庁舞台芸術創作奨励特別賞」を受けている。

　それにしても登場人物は遊女以外ほとんど長州人、会話も山口弁という劇を東京のど真ん中で観るのは何とも気分がいい。この劇を地元下関あたりで上演することはできないものか。

　このたびの上京では、古書店を歩き回り、山口県郷土誌三十点以上を買うことができた。

12月×日　今年を振り返る。自分で調節できる「出版」と「目録販売」は変わらない。「店頭販売」は全盛期に比べ二、三割落ちているが、商店街の交通量が四分の一以下に減っていることを思えばいいほうかもしれない。今は交通量が変わらなくても、どの商売もそのくらい落ちているのだから。

◆◆◆ 平成12年（二〇〇〇年）

1月3日　ＮＨＫテレビ『蒼天の夢』を見た。司馬遼太郎の『世に棲む日日』のテレビドラマ化である。松陰が野山獄で囚人たちに教える感動的なシーンもあったが、全体の流れに無理があり、一般にはわかりにくかったかも……。わずか二時間では、そもそも無理なのだ。主演二人のイメージも演出過剰のせいか自分のそれと違ったし……。

1月〇日　出来たてのCD-ROM版『世に棲む日日』を買う。松陰と晋作の生涯を中心に、幕末の人物や事件を、ボタン一つでパソコン画面に再現できる便利な「世に棲む日日・百科」だ。

　一坂太郎監修で遺墨など原史料もたくさん入っており、原田大二郎の朗読も味わい深い。これをじっくり見ればだれでも歴史好きになる。でもこの便利さは、進歩か退歩か？

2月〇日　『吉田松陰全集』〔普及版〕への試金石『松陰先生の教育力』の評判は予想以上。これで全集も何とかいけるか。

3月×日　県外では共同通信、日経文化欄、読売の大阪・西部本社版などに大きく取り上げられた『大村益次郎史料』ほか二点を発送。念のため「返本OK」のお知らせを入れた。約五百人のうち五人くらいかと思ったが、たった一人とは嬉しいこと。

3月〇日　古書目録を出す業者が極端に減った。販売手段がスーパーの軒先から目録に移って、じきに頭打ちとなっていたところに「インターネット時代来る」の情報で皆そちらへ。いま全国どこでも、店主は懸命にパソコンと格闘している。もちろん小社は、この「マツノ通信」頼みである。

3月×日　毎日新聞社の『アミューズ』四月号「特集日本の古本屋」に、小社が写真入りで紹介されている。こんな特集が珍しくないほど、新刊屋より古本屋の方がクローズアップされてきた。今後も他業界や素人が参入し、一大市場を形成するであろう。

　何事も始めるのは易しく、続けるのは難しい。永続の条件は、まず信用。次いで品揃え、つまり「復刻版の刊行をも含めた自給自足体制」の有無ではあるまいか。

3月〇日　上京。久しぶりに本郷の古本屋巡り。クルマの排気ガスでいやになる。

　東京の古書街も不況一色。特に全集物はさっぱり動かないらしく「いま全集を復刻するなど狂気の沙汰か」と、神田を歩きながら頭を抱える。でもあれほど氾濫していた『吉田松陰全集』だけは、たしかになくなっている。例外を信じたい。

3月×日　北九州市に『長周游覧記』の著者・横山健堂氏の孫娘にあたる人を訪れ、復刻版への跋文をお願いし快諾を得る。短歌結社を主宰している才媛であった。

　本書は小社のおこなった「復刻希望アンケート」ではビリであったが、どうみても名著なので、ぜひ復刻しておきたい。

3月〇日　『彷書月刊』四月号に、東京の大竹

正春氏が「マツノ読書会」のことを書いておられる。知らずに本誌を開いて一瞬、昔の亡霊に出会ったような気がした。「過去を語らず」をモットーにしているQ生であるが、恥を忍んで掲載しよう。

貸本屋という読書現場の最先端で多くのお客をつかみながら、供給が出版社頼みのため、読者を満足させることができなかった腹立たしさを思い出す。具体的にいうと、青春小説も時代小説も、それぞれ貸本屋で需要が生じた三、四年先でようやく出版社は動き始めた。販売を取次や書店に任せ、読者の要望を敏感に察知する機能に欠けた出版界に、今そのツケが回っている。

3月×日　週一回ファックスでくる「地方・小出版流通センター通信」の巻頭言は出版・流通業界の触覚のように貴重な情報源である。本日の文章は特に切迫した現状を的確に表現している。

「二千年の歴史をもつ本の世界はどうなっていくのか？不安がいっぱいの春です。国会図書館は二百二十万点の収集データを公開します。いま生きている本、入手できない過去の本、すべての本の情報が時間・場所を問わず読者のものとなる時代がきます。これに加え、古書、リサイクル本の情報まで加われば完璧で、出版の世界を激変させる可能性を秘めています。消費者サイドに立ったインフラやサービスの構築に様々（特に業界外の人々が）に参入することにより、書店、取次、出版社の存在意味が問われる一年になるでしょう。あなたの〔会社〕は、そして〔あなた〕は生き残れると思っていますか？　という〔問い〕を自分にも、これを読むみなさんにも問いかけておきたい年度末です」

Q生だけでなく、他業、傍系、地方の者には、こうなることはわかっていたと思うがどうだろうか。

4月〇日　紀田順一郎氏に『長周游覧記』復刻版への解説をお願いし、快諾を得る。この『長周游覧記』は作家の古川薫氏に、また毎日新聞社刊の『激動二十年』は山口県出身の俳優・原田大二郎氏に、それぞれ素晴らしい推薦文を頂いているのに、小社の都合で刊行が延び申しわけない限り。

4月×日　柳井方面へ買い入れ。息子と車二台で何度も往復する。『古事類苑』の元版と復刻版など歴史関係が多い。でも半分を占める中国古典の復刻書は売れるかどうか。小社の復刻版もかなりある。

今春は各地からの大口買入れが多く、なぜか『防長風土注進案』の美本が三組もたまった。

4月〇日　最近「オンデマンド出版」とかいって、いかにも活字が空を飛んできて、どんな珍本でも極少部数でも、場所を選ばずにすぐ印刷・製本できるようなことをマスコミは伝えるけど、それは幻想かペテンである。本づくりはそんなに甘くない。

4月×日　下関駅で元山口県文書館専門研究員（現在梅光女学院大学教授）の利岡俊昭氏に何十年ぶりかに会う。

『長府毛利家乗』は二十五年前に復刻されて

いるが、和本十八冊に分割されていて使いづらいので、A5判の洋本一冊にまとめてみたいという当方の申し出に対し「殆ど知られていないが、実は本書には附録として大部の〔史料編〕がついている。これを活字化してはどうか」という提案を受けた。

利岡氏は『萩藩閥閲録』『福原家文書』刊行の際の中心人物であり、史料一筋の人として、その世界では夙に知られている実力者である。早速着手することになった。

5月〇日　上京。大和書房の社長・南暁氏と一献。三十年前に大和版『吉田松陰全集』通称〔大衆版〕を担当された人でもある。業界をめぐる有益なお話を聞かせて頂いた上、いま〔大衆版〕を復刻する意志のないことを再確認できた。

5月×日　「高杉晋作史料」の校訂は、田村哲夫・一坂太郎のコンビで着々と進み、刊行のめども立ってきた。これぞ、待たれている本格的『高杉晋作全集』なのだ。

5月〇日　岩波書店から『吉田松陰全集』〔元版〕別巻の復刻許可がおりた。全十二巻の〔普及版〕には「松陰自身の文章」は網羅してあるけれど「松陰についての文献」は省いてある。〔元版〕の別巻にはそれが完璧にまとめてあるのだ。「もし別巻の許可が下り、それを付けても売値は六万円より上げません」と岩波へ決意を示したのが効いたのか。いずれにせよ、岩波書店へ最敬礼。

6月×日　今回特価コーナーの目玉『周防の女たち』の著者・島利栄子さんの仕事が日経の文化欄に大きく出た。

6月〇日　『陰徳太平記』と『安西軍策』がもう出来てきた。各三百部しかないため、もし売り切れた場合、お客様から叱られそうだが、これからは足りないくらいが良いと思う。

7月〇日　このたびの「マツノ通信⑤」にはなぜか、うっかりミスが多かった。次号は皆無にしなくては。

7月×日　六月末に発送したクロネコメールはその後、不着三件が判明。すぐ後に出したPRハガキに「パンフ不着の方はお知らせを」と書いたから良かったものの、これを出さなかったらどうなっていたやら。

7月〇日　『陰徳太平記』は三百部限定なので、直接の関係者五名以外はどこにも献呈できず。

昔のことであるが、マスコミに送ると、じきにその本が古本屋に出回ることもあった。当時PR用は「限定番号入」でなく奥付に「私家版」の印を押していた。古本屋にそれが出た場合、余分に作っていると思われるようで、いい気はしなかった。

7月×日　前回のPRハガキに「『陰徳太平記・索引』の作成スタート」と書いたけれど、これは当方の早とちりであった。完全原稿に近いと思いこんでいたのに、まだ小社の手に余る段階なので話は振出へ戻った。当事者の藤岡大拙氏及び、「索引」を心待ちしておられたお客様には、深くお詫び申し上げたい。

8月〇日　「マツノ通信⑤」の売れ行きを見る限り、歴史書の個人需要に低調の兆しはほと

んどない。

一般の需要もさることながら、いま図書館の予算が大幅に減っていると聞く。小社のお得意様に公共・大学図書館の占める割合はわずか3％。無理に広げなくてよかった。

8月×日　図書館といえば「いまどき『吉田松陰全集』が売れますか。どこの図書館にも昔からあるのに」と、ある図書館人からいわれた。

図書館から見ればそうかもしれない。でも一般の需要は常に変動する。たとえば『大村益次郎文書』は二十三年前、小社が初めて刊行して評判になったものである。小社の出版物としては古本屋にもよく出回っていたのに、今春『大村益次郎史料』の刊行と同時に再復刻したところ、四百部以上も売れた。

Q生の観察によると通信販売の顧客の新陳代謝は年一割。理屈から言えば十年で一新する。これが出版する側の根拠なのだ。

8月〇日　かつて大和版『吉田松陰全集』の担当者であり、今は大和書房の社長・南暁氏、北海道大学名誉教授・田中彰氏ら徳山に会し一献。『吉田松陰全集』復刻の仕事一気にはかどる。

8月×日　「マツノ通信⑤」への注文で出版物を含め多くの本を発送したが、商品や入金をめぐるトラブルは今回も皆無であった。このお客様こそ小社の最高最大の財産である。

8月〇日　『高杉晋作史料』は、校了となった本文に一坂氏が「注」を入れている。まだ難読個所も残っており、来秋完成が目標である。これは文書類だけでも『高杉晋作全集』の倍近く入っている。

8月×日　地元出身高校の同窓会。当番期なので助っ人を頼まれ、学校の歴史や現況を紹介した新作ビデオの売り子となる。でも盛り上がっている席の中に入って売り歩く勇気なく、実売ゼロ。あっという間に四十本も売った女性もいたというのに。

通信販売でよかった……。

8月〇日　古本屋の業界誌『日本古書通信』の「２０００年日本の古本屋」は業界の現状を伝える格好の記事だ。アンケート形式で現役の古本店主から地域別に現状を聞き出しており、この八月号は「山陰・山陽の巻」。一般の不況以外にも、活字離れ、大型店の進出、販売形態の変化など、問題山積は全国共通らしい。

でもQ生にとって「この道はいつか来た道」である。故あってその全盛期を過ぎてから貸本屋を始めたQ生は、今から三十年前、衰退する貸本業界から古本業界を眺め、あまりにも危機感がなく、安易な商売なのに驚いていた。

だから古本屋になってからも「そのとき、生き残るには……」これを第一の課題としてきた。まして選んだのが歴史専門店。「歴史を学ぶのは、将来を見抜くため」であれば、その専門店に自店の将来への見通しがなければ「紺屋の白袴」となる。

8月×日　古川薫氏の写真が前回と合わせて三つも重なるため『吉田松陰全集』の推薦文は、ご了解を得た上、もったいないけど前半

を割愛させて頂いた。

よく考えているつもりなのに、なぜか企画でつまずく。長期展望はあるけどすぐ前が見えない。こんなことで歴史専門店は大丈夫なのか？

8月〇日　静岡大学教授の田村貞雄氏来店。以前から小社刊行予定の、安藤紀一編「前原一誠年譜」「前原一誠関係文献目録」等を含む『前原一誠関係史料』（仮題）の編集を急いでおり、今年中には原稿ができるとか。

8月×日　『長周游覧記』復刻用原本の頁を点検している。どの頁を開いても面白くて仕事の手が止まってしまう。名文でもあり、これぞ山口県について書かれた本のベストワン。商売抜きで絶対確信のお薦め本だ。

それにしても、情報過多と出版洪水に明け暮れた戦後五十年。なぜ個性的な本が少ない？昔の人は偉かった。

8月〇日　地方出版社の雄として知られる松本の郷土出版社は、このほど『〇〇の百年』シリーズの全国展開をほぼ終えた。同社の極秘内部資料によると、山口県は長野、新潟、広島の三県についでよく売れたらしい。同じ維新の雄藩でも、鹿児島や高知はあまり売れていないという。

8月×日　今回の三点中『吉田松陰全集』は大部で製作に時間がかかる上、需要の予測が全く立たず、部数を確認してからスタートするので刊行が遅れる。

9月〇日　最高の知名度・完璧な内容・全力投入の超特価。これでもし売れなくても悔いはない。『吉田松陰全集』ＤＭ発送直前の感想である。